

経験をすべて糧に

—患者さんをトータルに診る理想の地域医療を実現—

徳永内科医院院長 徳永 尚登

「助けてもらった」思いが、 医師への道を後押し

出身は、当院の所在する福岡市南区横手です。福岡県立福岡高校を卒業後、久留米大学医学部第一内科での勤務を経て、平成6年6月6日に開業しました。

小さい頃は病弱で、頻繁に医師のお世話になっていました。3歳で溶連菌感染症に罹患し急性糸球体腎炎を合併、福岡赤十字病院に入院した経験があるほどです。そのため、周りの子どもたちに比べ、私にとって医師はとても身近な存在でした。

父親は公務員でしたが、親戚に医師が多かったこともあり、しだいに将来像として医師を思い描くようになりました。ただ、物理や数学よりも文系科目の方が得意で、今でも考えごとをする時に「自分は文系だな」と思うところがあります。それで、中学の頃には「医学か司法の道に進みたい」と考えるようになっていました。

最終的に医師になることを決めたのには、高校時代の経験が大きく影響しています。高校2年の7月、期末テストの最中に突然、右下腹部が痛みだしたのです。診断は虫垂炎で、本来ならすぐに手術をすべきでしたが、「テストを終えるまで」と我慢を重ね、かかりつけ医に往診をしてもらっていました。すると、虫垂が破裂して汎発性腹膜炎を起こし、病院で緊急手術となったのです。

開腹して腹腔内洗浄を行いました。現在のように優れた抗生物質のない時代です。膀胱直腸窩

膿瘍で3週間後に再度開腹手術を行うことになり、初めて「もうだめかもしれない」と死を意識しました。まさに、生きるか死ぬかの状況だったので

す。結局、40日後には無事退院することができましたが、「助けてもらった」という思いは強かったですね。入院中は主治医(執刀医)の医師も毎朝ベッドサイドに訪問してくれ、非常に心強かったことも覚えています。その経験は、「医学か法学か」という漠然とした思いから、進路決定の際、私に医学部受験を選択させる大きな動機となりました。

生と死の境、 シビアな呼吸管理の臨床を経験

久留米大学医学部卒業後、専門領域として呼吸器を選択しましたが、その理由にはまず、「臓器の中では“心肺”が重要だろう」という考えがありました。ただ、文系科目が得意だった私にとって、「心臓は循環動態など、血液の物理的な動きの把握が難しそうだ」という印象でした。一方、呼吸器は肺の画像診断に興味深く、久留米大学医学部第一内科に入局することになりました。

当時、画像診断といっても胸部CTの利用が始まり、まだMRIは登場していません。背腹方向に重ね合わせた2D画像の胸部単純レントゲン写真から、いかに全体像や病変、経過を読み取るかが重視された時代です。1枚の単純レントゲン写真をもとに、論理的に病変の部位や質を議論するレントゲンカンファレンスは、とても楽しかった